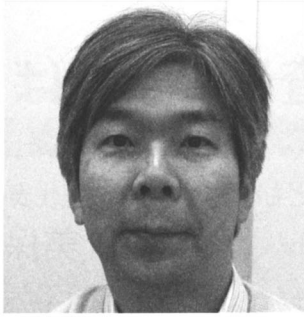


審査員のことば

東京大学大学院
総合文化研究科教授

酒井 邦嘉



昨年に引き続き、幼児と小学生低学年の作文を審査しました。作文は、あらゆる学習の基本です。鉛筆で、ていねいに文字を書くこと。たくさんの言葉の中から、最もよい単語を選び出すこと。そして、読む人に伝わるような文章にまとめること。この3つの基本は、どれも身につけることが難しく、そしてうまくできるようになったら本当に楽しいことです。

よい文章が書けるためには、言葉の力を身につければ良いだろうと誰もが考えがちですが、それは違います。いちばん大切なものは、目に見えないのですが、それが何だかわかりですか。

いちばん大切なものは、「心」なのです。心がねじ曲がっていたら、どんなにたくさんの言葉を知っていても、悪い文章しか書けません。よい心をもっていれば、言葉が少しくらい足らなくても、読んだ人の心を動かすことができます。

素直なよい心をもっているのに作文が苦手だというお子さんは、本を読むことです。本を読んで考え、また考えて読むのです。その本を書いた人の心が自分に伝わるということがわかれば、今度は自分の心がまわりの人に伝わるように書けばよいのです。

この作文コンクールは、競い合うためにやるものではありません。オリンピックと同じで、参加することが大切です。私は、「心が伝わること」をいちばんに考えて審査しました。その意味で、今回もとても良い作品がたくさんあったと思います。